

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◇◆◇ No.0621 ◇◆◇

21/02/03

【 2月相場、2ヵ月連続小動きか否かの「正念場」 】

先週レポートしたように、1月末まで残り2営業日となるなか、月間変動幅わずか1.80円にとどまっていたドル/円だったが、最後のラストスパート、怒涛のドル買いに月間変動幅は最終的に2.34円まで拡大した。なんとか形だけは整えられたとも言えそうだが、ここ数年の1月相場は総じて荒れ模様をたどっており、それからするとまったくの期待外れと言ってよい。

さて、そんな1月相場を受けた足もと2月相場は、過去の経験則を参考にすると、「動くときには大きく動くが動かない年はまったく動かない」ーという両極端になり易い傾向が強うかがえるようだ。1月相場が小動き。まったくの期待外れに終わっただけに個人的には捲土重来、その巻き返しを期待している。

◎1月相場は期待外れ、ドル/円だけにとどまらず「為替」全体の動きを注視

2月相場の特徴についてレポートするうえで、まずは勝敗・星取表をみておく。1990年以降昨年まで過去31年は14勝17敗となっており、若干ドル安方向にバイアスがかかるが、それでも五分に近い。あまり特徴らしい特徴とは言えないようだ。

しかし、別の特徴を調べてみると、「動くときには大きく動くが動かない年はまったく動かない」ーという両極端になり易い傾向が強うかがえることがわかった。果たして今年の2月相場は「動く」or「動かない」どちらのパターンをたどるのだろうか。いずれにしても、ある種の「正念場」と言える気がしている。

たとえば、2009年の2月は月間変動9.76円で年間を通してもっとも動いた1ヵ月となっていたほか、2012年の2月も年間でもっとも変動した月。また、2016年は順位的に年間3位に留まったものの、月間の変動幅は10.45円とかなり大きな動きを記録しているうえ、2018年は月間変動幅4.93円で年間2位、昨2020年は同4.72円でやはり年間2位を記録していた。

その反面、2014年は逆に「動かない年」。月間を通した変動はわずかに2.1円で年間10位の小変動、また2017年も月間変動幅は3.36円、同9位に終わるなど、年間を通して動きの鈍い1ヵ月だった。まったく動かない2月相場にも一応要注意。

なお、2月相場が、「動くときには大きく動くが動かない年はまったく動かない」ーという両極端の価格変動になり易い傾向は、ドル/円だけに限ったことでなく、ユーロ/円やポンド/円など円絡みのほかの通貨ペア全般にみられる特徴だ。

今年の1月相場はドル/円だけに限らず、ユーロやポンド絡み、あるいはオセアニア通貨なども総じて動きが鈍かった。それだけに、足もとの2月相場は為替市場全体で前月の反動がみられることを是非とも期待している。

一方、カレンダー的な側面から2月の出来事を調べてみると、過去の2月は重要事象それも為替や金融に関することが多いことがわかった。

一例を挙げると、「日本が新円へ切り替え(1946年)」、「ドル/円が変動相場制へ移行(1973年)」、「ドル安に歯止めをかけるルーブル合意(1987年)」、「G7声明で『ドル安は正終了』を宣言(1997年)」などのほか、比較的最近には「G7が『為替は市場で決定されるべき』との緊急共同声明を発表(2013年)」といった事象が起こっている。

また株式に関しても、昨年起こった一連の「コロナショック」を受け、多くの記録が更新されてしまったが、それでも「日経平均株価がブラックマンデー以来の暴落、前日比1569.10円安を記録(1990年)」、「中国発で世界同時株安発生(2007年)」、「NYダウが終値で1175ドル安と史上最大の下げ幅記録(2018年)」ーなど、かなり興味深い出来事が過去には記録されていた。

こうしたことは、もちろん毎年起こるものではないものの、依然として「コロナ禍」の状況下、「バイデン新米政権誕生」など政情も依然不安定で気になるニュースも少なくない。今年についても、リスク要因として一応頭の片隅に留めておいて損はない気もしている。(了)

